

萩

ものがたり

Vol 17



若き日の伊藤博文

一坂 太郎

H2
1

若き日の伊藤博文

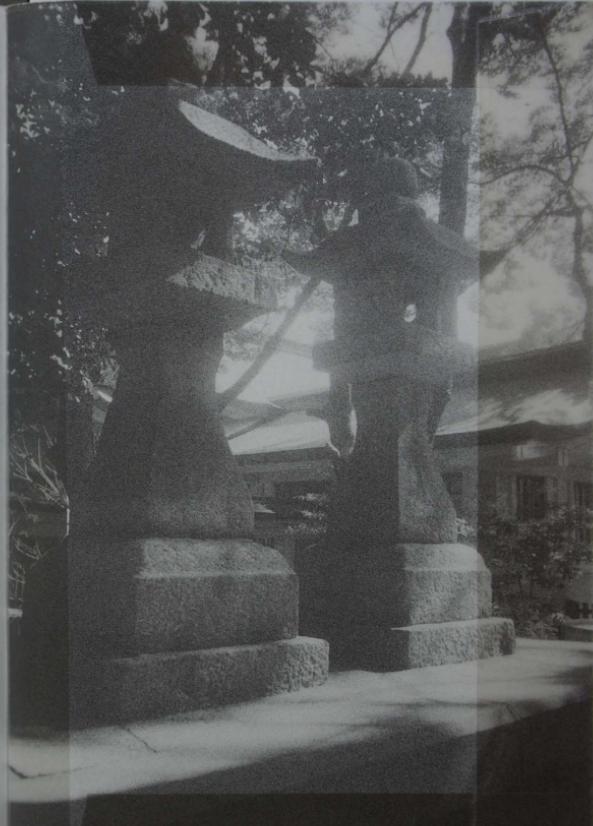
一坂 太郎

シリーズ
萩 ものがたり ⑯

発行所

氏寄

日



伊藤博文が明治2年9月、神戸灘川の楠木正成墓前に献じた石灯籠（神戸市中央区灘川神社）

はしがき

本年(平成二十年)五月二十三日は「兵庫県」が誕生してから百四十年の節目にある。もっとも最初の兵庫県は、播磨九郡内にある分割地と、西攝四郡内の旧幕府領・御三卿領にすぎない。そして、初代知事となつたのが、後介こと伊藤博文であつた。

兵庫県に生まれ育つた私は小学生のころの郷土学習で、その史実を知つた。当時は千円札に描かれていた肖像が「伊藤博文」だったから、親しみも湧いた。それは頭髪をたくわえ、頭髪も薄くなつた、いかにも明治の政治家然とした風貌で、初代知事という肩書きも自然に重なつた。

ところが後年、伊藤が初代知事となつたのは数えの二十八の時で、千円札の肖像のイメージとはほど遠い青年であることを知り、驚いた。写真で見る知事時代の伊藤は、まだ幼さすら残す若々しい風貌で、レンズに向かい薄ら笑いを浮かべているかのように見えた。なぜ、この若者が知事の椅子を得たのか、幕末維新という動乱の海を、縣命に泳ぎ抜いた若者が、ひとつ岸に辿り着くまでを追つてみたい。

目次

第一章 開国と攘夷と………	5
第二章 神戸開港……………	22
第三章 神戸事件……………	32
第四章 初代兵庫県知事………	42

表紙　若き日の伊藤博文
裏表紙　伊藤博文旧宅（萩市椿東）

第一章 開國と攘夷と

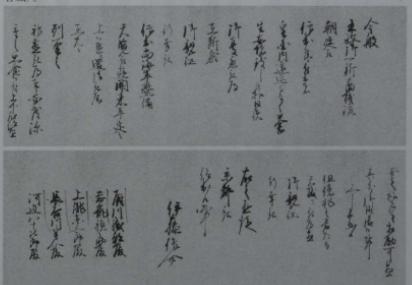
攘夷と留学生



左より2人目が初代兵庫県知事時代の伊藤俊介（博文）。右は田中光顯。

伊藤俊介書簡

明治元年3月15日、朝廷から出た大阪行幸などの布達を書き写し、関係者に回覧させたもの。当時「俊介」と称し、神戸で外国人応接掛を務めていた（著者蔵）。





利助生家（復元、光市）

伊藤俊輔は天保十二年（一八四一）九月一日、周防國熊毛郡東荷村字野尻（現在の山口県光市大和町）

おいたち

「まゝをのはじをのひてゆくたびは、すめらみくにのためこそしけ」
出發にあたり、一七四歳の俊輔が詠じたとされる和歌である。

鎧を切り、刀を外して慣れぬ洋服に身を包むのが、恥ずかしくてならないのだ。しかし自分たちの行為はたゞえ不法でも、必ずや日本（皇國）の将来のためになると信じていたのである。

ところが長州藩の攘夷には、裏の顔があった。藩首脳部の周布政之助や桂小五郎は、攘夷が不可能であると知っていた。知つてはいたが、攘夷により日本を閉鎖させ、開国した幕府を非難して、外圧を發ねつけようとした。その上で、天皇を頂点とする新体制を築き、新たな開国を行おうと考えていたのだ。

だから、新しい時代に備えて、人材育成もひそかに進める。外国艦船と同時に、イギリスロンドンに、

五人の密航學生を派遣した。後年、「長州ファイブ」と呼ばれるになる若者たちである。
五月十一日、横浜を発ったのは、井上聞多（著・遠藤謹助・野村弥吉（井上勝・山尾庸造（庸三、そして伊藤俊輔（博士）だった。五人はひとまず上海に渡り、そこから二隻の帆船に分乗し、約四ヵ月半を費やしてロンドンに渡る。
の農家林家に生まれ、はじめ利助と言った。父は十蔵、母は琴子、利助は當時とては珍しい一人っ子である。
父十蔵は畔頭という村の世話役仕務を務めた時、十二石ほどの大公米を独断で使うという事件を起こす。しかも初めてではなかったので、本家から埋め合せを拒否されたり十蔵は、妻子を妻の実家秋山家へと預け、弘化三年（一八四六）十一月、二十里離れた長州藩の牙城である萩へ出た。
萩で職を転々とした十蔵だったが、藏元付仲間の水井武兵衛に雇われる。ここから、十蔵の運命の扉が開き始める。水井は十蔵を氣に入り、あつく信頼するようになつた。水井は中継ぎ養子で、実は伊藤弥三右衛門の次男である。役目を終えた水井は仲間株を買ってもの伊藤姓に戻り、直右衛門を名乗つた。
生活も落ち着いたので十蔵は、東荷村から妻子を萩に呼び寄せる。九歳の利助は、こうして萩に出た。そして



萩往還公園に立つ（右より）伊藤利介・桂小五郎・木戸孝允像。

吉田松陰（寅次郎）が主宰する松下村塾は、利助の住居と同じ松本村にある。萩の中心である三角州からははずれた、松本川を越えた東方の山のふもとだ。アメリカから高圧的な態度で開国を迫られ、幕府が屈した様を舌占で目の当たりにした松陰は、危機感を強める。そこで西洋の実情を観察するため、安政元年三月二十日伊豆下田沖に停泊中たったペリー艦隊に潜り込み、密航を企てるが失敗。萩に送り返されて一旦投獄された後、実家で謹慎の身のまま、松下村塾を主宰していたのだ。

安政四年九月、帰國した利助は来原に勧められたとおり松陰のもとを訪れ、指導を受けるようになった。利助が安政五年一月二十一日、友人河野友三郎にあてた手紙では、塾の盛んな様子や、自分も昼夜読書していると知らせている。

■ 松陰との出会い

安政元年（一八五四）元旦（異説あり）、直右衛門から見込まれた十蔵は、家族ぐるみで伊藤家の養子となる。嘉永六年（一八五三）六月、アメリカのペリー提督率いる黒船艦隊が浦賃沖にやつて来て、幕府に開国するよう求めた。このため、幕府は諸藩に江戸湾の警備を任せたが、長州藩は相模國（現在の神奈川県）鎌倉から宮田にかけての警備を担当する。安政三年九月、十六歳の利助は警備の一員として、宮田陣営に派遣された。ここで、組の支配頭として赴任して来た長州藩士の来原良雄と出会い、利助を見込んだ来原は、目をかけて熱心に利助を鍛え上げた。冬でも午前四時ころ、騎馬提灯を携えて利助の小屋に来て、熟睡する利助をたき起にして小脇に抱え、自分の小屋に連れて帰って学問を指導した。あるいはつねに裸足で海岸山野を歩き回らせた。武士は戦場において、いかなる困難に遭遇するとも限らない。もし戦地において草履を得ることが出来ない時は、いかがするか。ですから平常より、裸足で歩行する習慣をつけおかねばならない」と、来原は利助を鍛え上げてゆく。

十七歳の秋、利助は任務を終え帰国する。そのさい来原は、ささやに学問を続けようと、吉田松陰あての紹介状を与えた。

やがて松陰は、利助の中に「周旋家」の才を認める。また、利助は同じ年頃の塾生たちと、交流を深めてゆく。松陰との出会いは、もちろんだが、松下塾で築かれた人間関係が、利助のその後の人生に大きな影響を及ぼす。

松陰が門下生に繰り返し説いたのは、「志」を立てる事である。そのためには各自を旅して見聞を広め、自分が何をなすべきかを考えた上で、行動起こすことが大切であると教えた。

安政五年七月二十六日、長州藩は形勢観察のため密使中村道太郎を京都に派遣する。随行員は杉山松介・山県小輔（有朋・伊藤左之助・岡田仙吉・總裁義之助）、そして松陰の推挙もあって利助が選ばれた。同年八月十九日、幕府が勅許を得ぬまま白米修好通商条約を締結したこと、京都は政争の舞台となりつつあった。江戸時代はじめに定められた「禁中並公家諸法度」により、幕府は天皇の行動を厳しく規制し、政治の介入を禁じていたが、そのルールは開国問題により破綻しかけていた。

約一方月間、京都に滞在した利助は、天皇の存在を強く意識し、時代が大きく変わりつつあるのを実感したであろう。

十月一日、萩に帰った利助だったが、同月九日には御手当御用掛を任せられた来原威蔵に従い、今度は長崎へと旅立つている。洋式銃陣を学ぶため、長崎に派遣された長州藩士を監督するのが来原の役目だ。来原は、早くから洋式銃陣の採用を藩に訴えていた。

こうして長崎に着いた利助も、洋式銃陣を学ぶ。十一月九日には萩に帰ったが、十九日にはまた来原に

従い長崎に赴き、小銃雷管の製法を学んだりした。

長崎伝習の制度が廢止され、安政六年六月十七日、来原に従った利助は萩に帰る。翌十八日、利助は長崎在勤中の功により、藩主毛利慶親（敬親）から金一両を受けた。

京都で朝廷権威台頭の風を感じ、長崎で西洋の空気を吸った十九歳の利助は、すでにかなりの事情通だったと言えよう。今度は、政治や文化の中心地である江戸が見たいと希望していたところ、まもなく機会がめぐってくる。桂小五郎（木戸孝允）が江戸赴任にさいし、利助を手附として同行させてくれたのだ。来原にとり桂は妻の兄、つまり義兄であり、来原が推薦してくれたのだった。萩出立は九月十五日、江戸に到着し、桜田門外にあつた藩邸（上屋敷）に寄宿したのは十月十一日だ。

そのころ、幕府の大老井伊直弼は独裁者と化し、政敵であった一橋派や、開国政策に反対する者たちに對し、激しい弾圧を加えていた。「安政の大獄」である。

利助の恩師である松陰も大獄に連座し、江戸に送られ、その年七月から云馬町の牢に繋がれていた。そして利助が江戸に到着して間もなくの十月二十七日、三十歳の若さで処刑されてしまう。利助は桂らに従い、小塚原でひそかに松陰の遺骸を受け取った。衣服を奪われ、裸の遺骸に、桂は補津（桂は補津）を、飯田正伯は下着を脱いで着せた。利助もまた自分の帶を解いて巻き付け、納棺、埋葬する。

松陰は処刑される直前、獄中で門下生にあてて『留魂錄』という遺書をしたためた。その冒頭には、



ロンドンにおける秘密留学生。
左から井上・遠藤・野村・山尾・伊藤。

二年八月二十七日、江戸で自決したのだ。享年三十四。来原は、「航海遠略策」に賛同していた。しかし藩論が攘夷に変するや、自らの忠義を示すため、横浜の外国人居留地を襲撃すると言い出す。これを藩主世子から懲せられ罰金を科され、死を選んだのだった。

ともかくこの時期、朝廷と結び付き、攘夷路線を突き進む長州藩の勢いは凄まじいものがある。朝廷からの攘夷督撫に答えるため、文久三年二月、上洛した将軍家茂は、天皇の前で「五月十日」を攘夷行の期限とする、約束させられた。

また、それまで国威抜いた吉田松陰を、長州藩はシンボル的存在として祭り上げてゆく。そうした流れの中で、俊輔や入江九一・山県小輔・品川弥二郎・杉山松介・野村和作（遠・吉田稔麿といった足軽仲間たちが、松陰に師事した経験を認められ、士籍に列ぜられる。

そのころ長州藩では、西洋へ密航留学生を送り込む計画がひそかに進められていた。

井上聞多（鑑）・野村弥吉（井上勝）・山尾

「身はたどひ武藏の野邊に朽ちぬとも、留め置かまし大和魂」とある。たゞえ肉体は滅んでも、日本を変えたいと願う志はこの世に残したいという、凄まじい決意だ。門下生たちに志を受け継いで欲しいといふ、メッセージだった。

■過激な活動

その後、長州藩は藩士長井雅葉の「航海遠略策」を藩論とし、公武問の周旋に乗り出した。だが、幕府の開国を既成事実として認めた長井の説は、世の攘夷派の激しい反発を受ける。

そこで久坂玄瑞を中心とする松陰門下生が中心となり奔走した結果、長州藩は文久二年（一八六二）七月、藩論を公武合体から天皇の意旨を奉じた攘夷へと転させて了。統いて朝廷も、長州藩に促される形で、攘夷の方針を打ち出す。

この間、利助は後輔と名を変え、「志士」を気取つて政治運動の末端で駆けずり回っている。

たゞ文久二年十二月二十二日には、高杉晋作や久坂玄瑞ら十二名と共に、江戸品川御殿山に建設中のイギリス公使館を焼き打ちした。あるいは同月二十一日には、廢帝の故事を調査中と噂された国学者（學究）郎を、山尾庸造と共に暗殺した。

めまぐるしく動く時勢の中で、俊輔にとり悲しい事件が起る。最大の恩師とも言える来原良蔵が文久

庸造の三人が名乗り出て、四月十八日には内定していた。井上から誘われた後輔も、この計画に加わり、渡航する決意を固める。攘夷運動に参加しながらも、いたずらに列強を敵視するのではなく、その実情を知りたいとの願望を抱いていたのだ。それは師松陰が果たせなかつた夢でもあつた。

将軍が攘夷期限と定めた五月十日以降、長州藩は下関からアメリカやフランス艦を次々と砲撃した。そして十二日、ひそかに留学生五人は、横浜を発り、イギリス・ロンドンへと向かう。出発前、後輔は父にあてた手紙に、西洋の情勢を調べ、海軍技術を学ぶため、三年間渡航するつもりだと、述べている（伊藤博文伝・上）。

■西洋を見る

ロンドンに到着した伊藤後輔ら五人は、ユニバーシティ・カレッジ・オブ・ロンドン（UCL）の化学教授アレキサンダー・ウイリアム・ウイリアムソン博士の世話を受けながら、西洋の文明を実地に学ぶ。言葉やマナーをひととおり習得した後、UCLに聽講生として通つた。そして授業の合間にぬつては、国會議事堂・大英博物館をはじめ鉄道・図書館・上下水道・病院・公園・銀行・郵便局・劇場などを見てまわつた。

巨大な文明世界は後輔を圧倒し、休む間もなく驚きと感動を与え続ける。軍事力だけ強くなつても、文明が無ければ世界の中で取り残されること、痛感した。オックスフォード大学の学生ミトフォードの回相録には、ロンドンにおける後輔の印象につき、次のように述べている（岡岡繁「伊藤博文人生叢書」）。「彼は精悍にして野趣満々たるところは正に隼そのままであり、冒険好きで無類に陽気な青年、それでいざ仕事となれば正確且つ機敏、如何にも天びんの高鳴りする人物だつた」。

そんなおり、現地の新聞「タイムズ」紙上に、「四つの强国が、一二の日本の大名を懲罰する最後の協議を行つてゐる」との記事が出る。関門海峡における長州藩の攘夷活動により、貿易の不利益を被つたイギリス・アメリカ・フランス・オランダが、長州藩を攻撃する準備を進めていたのだ。これを知った伊藤後輔と井上闇多は、攘夷が不可能であると説くため、帰國を決意する。いくつ開国のために攘夷を行つても、度が過ぎれば、その先には「国しかない。わずか、半年あまりの留学生だった。ところが、命がけで帰国した二人の意見に、墨走る藩の首脳部は耳を傾げようとはしない。むしろ先国奴とのしられ、命を狙われるありさまだ。一人の話が理解出来そうな周布政之助や高杉晋作はすでに失脚し、藩政府から消えていたのも、不運だった。

■ 戦後処理の中で

こうして元治元年（一八六四）八月、長州藩は閨門・海峡に襲来したイギリス・アメリカ・フランス・オランダから成る連合艦隊十七隻と砲火を交え、敗北を喫した。ここに来て長州藩は、攘夷の無謀を悟る。そして、井上開多と伊藤後輔を起用し、高杉晋作らと一緒に戦後処理に当たらせることにした。

交渉は三同行わった。その結果、長州藩は攘夷の旗印を下ろす。今後は砲台を破壊し、外国艦の閨門海峡通過の安全を保証し、外国人の上陸を許すと約束する。

一回目と三回目の講和談判に伊藤として出席したのは、高杉晋作だった。ただし、家老の養子吉田刑馬（よしだけい）とともに身分を偽称していた。一回目のさいの晋作の様子を、イギリスの通訳官アーネスト・サトウは次のようになんと書き残している。

「日本の使者の態度に次第に現れてきた変化を観察すると、なかなかおもしろい。使者は、艦上に足を踏み入れた時には悪魔のようには自然としていたのだが、だんだん態度がやわらぎ、すべての提案を何の反対もなく承諾してしまつた。これには、大いに伊藤の影響があつたようだ」（傍点引用者：坂田精一訳『明治開拓の見聞』明治維新・上）

敗者であるにもかかわらず、目一杯突っ張って見せる晋作の姿が、目に浮かぶようだ。しかし連合艦隊側代表のキュー＝バー提督（イギリス）などは、そのような虚偽威嚇（し）には乗らず、長州側の書類の不備などを

を責めたようである。

威圧たり、煙に巻いたりといった談判が、まるで武勇伝のことく称えられるのが日本である。ところが国際社会の中では、そのような非近代的なハッタリは、通用しない。悪魔のように登場したものの、それが晋作にも分かって来たと思われる。だから態度を軟化させた。そして、それを理解させたのが、文明社会の空氣を吸つて帰国したばかりの後輔だったのである。

さらに後輔は修業特使井原主計（いはらぬし）に従い、イギリス軍艦に便乗して横浜まで出張する。長州藩に突き付けられた賠償金をめぐる交渉のためだ。結局、賠償金は幕府がねつことで決着がつき、九月二十三日、後輔は山口に帰り、金十両の因賞を受けている。

それからの後輔は、再び長州藩の同志たちと討幕運動に奔走した。

元治元年十二月には、征長軍に降伏した藩政府を打倒すべく、晋作が下関で挙兵。後輔は「花山春太郎」の変名で駆せ参じ、藩内戦を戦つた。そして晋作らが勝利すると藩政府は刷新され、「武備恭順」（表面は幕府に恭順し、裏面では実力を蓄える）の方針で固まつてゆく。

つづいて後輔は慶応元年（一八六二）七月に桂小五郎の命を急げ、井上開多と共に長崎に赴く。薩摩藩名義で、英國商人グラバーから軍艦や小銃を購入するためだ。イギリス帰りの井上や後輔でなければ、出来ない仕事であった。この時は「吉井恭誠」の変名を使っている。

このように長州藩において後輔は、便利な使い走りとして、よく利用されていた。日本各地はもちろん、

公爵伊藤博文題

明古徵

『西撰大鏡』の題字

俊輔はひそかに得た情報を、明石大久保町の常徳寺に送る。常徳寺よりは次の寺へ、さらに次の寺へと伝達され、長州藩に届く仕組みだ。こうした情報伝達ルートは、當時長州藩との関係が深かつた京都嵯峨の天龍寺が作ったといふ。

ある日、俊輔は明石のはずれ、大蔵谷という宿場で、豊江とよえといふ云妓うきと出会つた。豊江は本名を梅といい、明石の実相院住職広順が、お栄という女に産ませた子だつたといふ。俊輔は豊江の豪胆を、豊江は俊輔の機敏を見込み、一人は夫婦となる。豊江はのち、日本初のファームは俊輔は、一度結婚している。松陰門下の先輩にあたる入江九一(杉藏)の妹すみを、文久三年(一八六三)三月、士分に抜擢されたころ、親の勧めにより娶つたのだ。しかし共に生活する時間はほとんど無く、慶応二年三月に正式に離婚した。

命がけで世界を見て来たその経歴からしても、俊輔は当時の日本における第一級の人材だったと言えるだろう。ところが、俊輔に対する藩の待遇は、どうも冷たいような気がしてならない。文久三年に土雇となり、慶応三年三月に土分三十人通へと昇進した程度である。それは俊輔が農家の生まれであり、軽輩だったことと関係するのかも知れない。藩内には依然として強い封建意識があつたことは、容易に察せられる。

■明石に残る伝説

兵庫県の墨戸所在地神戸市の西隣は、明石市である。明石海峡を臨み、日本標準時の子午線が通ることでも知られる。ここは江戸時代、明石藩松平家(八万石)の城下であった。明石にはいまも、伊藤俊輔にまつわるひとつの一伝説が残る。慶応二年(一八六六)、明石城下の雲晴寺(曹洞宗)の茶室に、俊輔が潜りこんだというのだ。

俊輔は、徳川一門である明石藩の内情を探れとの密命を帯びていた。山陽道の要衝である明石の動向は、今後、長州藩の動きに影響を及ぼしかねない。俊輔の間諜(スパイ)としての役目は重要だった。俊輔を手引きしたのは、長州出身である晴雲寺の住職である。住職は俊輔を、藩の実力者で近習の手塙又右衛門に近づけ、馬丁にさせた。

とは確かであろう。

また、俊輔の妻となった梅子の前歴だが、下関の商家の娘で、下関・稲荷町いろは樓の養女ということになつてゐる。だが、宋達を逃げた俊輔こと伊藤博文は、妻の出生を聞かれるのを嫌つたという。戸籍調べの巡回が訪ねて来るとき、「伊藤博文の妻にまちがないな。そんなにくわしく聞かんでもよい」

と言つて、突っぱねたという逸話が、村松剛『醒めた炎』に出てくる。

維新後、豊江こと梅子は、明石に住む母に発行されたばかりの五円札数枚を送つたという話もある。お

榮は最初、お札の意味が分からなかつたが、隣家の主人に教えられ、神棚に供えて灯明をあげて嬉し泣き

したといふ。

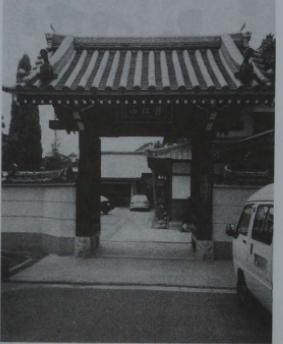
以上紹介した豊江の逸話は、明治四十四年（一九一）出版の『西撰大觀』には伊藤博文が「明徴古今」の題字を寄せている（出版時には他界していた

が）。ところが『伊藤博文伝』や『防長回天史』など、長州側の文献には一切出てこない。取

るに足らぬ創作なのか。あるいは初代総理大臣の過去が、スパイではよろしくなかつたため抹消されたのか。

ただ、俊輔を手引きした雲晴寺住職が、長州出身というのは事実だ。兵庫県芦屋市出身の明治十年の報告書によれば、安部中蔵、長門厚狭郡吉田村（現在の下関市）士族安部龍吉

の三男である。これで逸話のすべてが眞美とまでは言わぬが、一片の眞実を含んでいるこ



俊輔が潜伏したという雲晴寺

第二章 神戸開港

兵庫開港延期

伊藤慶輔^{ニシイハラ}こと俊介が、明治日本の政治家として最初の足跡を刻んだのは、開港間もない神戸の地であった。ここではしばらく、長州の地から離れて、神戸がいかにして開港されたのかを見ておこう。

幕末のころ、幕府が頭を抱えていた大きな問題のひとつが、兵庫（神戸）の開港をいかに実行するかだつた。

安政五年（一八五八）六月十九日午後、神奈川沖に停泊するアメリカ軍艦ボーハタンの艦上において、アメリカ・幕府間に「日米修好通商条約」が締結された。この中には、公使の江戸駐在や神奈川・長崎・箱館・新潟、そして兵庫の開港などが定められていた。当初は文久一年（一八六一）十一月から開港される予定であった。

ところが外國嫌いの孝明天皇は、条約を認めない。貿易により、国内の経済も大混乱する。このため、幕府に対する非難は高まり、京都に近い兵庫を開港出来るような雰囲気では到底なくなってしまう。そこ

で幕府は文久元年十一月、竹内保徳を全権とする使節團をイギリス・ロンドンに派遣する。

竹内には交渉のすえ、新潟・兵庫および江戸・大阪の開港開市の延期を承諾させた。これが「ロンドン開港書」である。また、他の諸外国もイギリスに同調したので、幕府はひとまず安心した。新しい期限に決まつたのは太陽曆の「一八六八年一月一日」。日本の暦では慶応三年十一月七日にある。

ところがイギリスは文久三年七月には薩摩藩と、元治元年（一八六四）八月には長州藩と砲火を交えた。ええ、考え方を変えゆく。日本の代表は幕府（将軍）ではない。それは朝廷（天皇）であり、しかも諸大名は貿易を望んでいると理解するようになる。

そこで、イギリス公使ハリー・パークスはフランス・オランダ・アメリカの代表と相談して、九隻の艦隊を組んで横浜から突じょ、兵庫沖にやつて来た。慶應元年（一八六五）九月十六日のことだ。そして即刻兵庫を開港するよう、幕府に圧力をかける。

追い詰められた幕府は朝廷に交渉する。そして十月五日になり、孝明天皇は締結から七年を経てようやく条約を許可した。ただし兵庫開港については認めないまま、大きな宿題として残る。一応の成果をおさめた列強の艦隊は、九日朝から十日夕方にかけて、兵庫沖から去つて行った。

その後も幕府は江戸において老中水野和泉守・松平伯耆守らをイギリス・フランス両国公使と談判させ、兵庫開港の中止を求めるようとしたが失敗した。もっとも開港中止が無理であると、幕府は百も承知している。こうした談判を行つことが朝廷に対する一種のボースだったのだろう（浜沢栄一『徳川慶喜公伝・三』）。

■孝明天皇崩御

このような兵庫開港をめぐる攻防戦が頂点に達しようとしていた慶應二年十一月二十五日、孝明天皇が三十六歳の若さで急死した。病名は痴癡ちきよ、喪が発せられたのは二十九日である。天皇は熱烈なる攘夷論者だが、討幕者ではなかった。むしろ幕府をあつつく信頼し、期待していた。このため討幕派による毒殺ではないかとの噂が囁かれたのも、無理からぬところであった。

イギリスの外交官アーネスト・サトウは、「この保守的な天皇をもつてしては、戦争をもたらす紛議以外の何ものも、おそらくは期待できなかつたであろう。重要な人物の死因を謀殺にもとめるのは、東洋諸国ではよくありふれたことである」と、語っている。

江戸時代の歴代天皇の中では、政治的影響力の強かつた孝明天皇の崩御は、当然政治的大事件となつた。幕府にとつては、兵庫開港問題の解決に希望をもたらした。半面、薩摩や長州などに、武力討幕の可能性を生じさせた。

翌三年一月九日、^{元年}践祚せんく（即位）した陸仁親王（明治天皇）は、数えの十八という若さだ。内憂外患のこの時期に、高度な舵取りが出来る年齢ではない。

十五代将軍となった徳川慶喜は慶應二年三月五日、朝廷に兵庫開港の勅許を求めた。ところが孝明天皇を失つたとはいえ、朝廷内の反対は強く、十九日に却下された。二十二日、慶喜は再び許可を求めたが、

二十九日、やはり却下された。

それでも慶喜は、不退転の決意を固めて笑き進む。二十八日にイギリス・オランダ・フランス、四月一日にアメリカの代表と大坂城で会見した慶喜は、兵庫開港を約束の期限までに実行すると宣言したのだ。

薩摩藩などはこれを失敗させ、慶喜の国際的信頼を失墜させて、討幕の好機に利用しようと企む。そして、反幕府の正親町三条実愛を講奏として復讐させるなど、朝廷の人事にまで手を廻して勅許が下りるのを阻止しようとした。また、朝敵の烙印を押されたままの長州藩に対し寛大な処分を行うのが先で、兵庫開港はその次だと主張し、薩摩藩は時間稼ぎとする。

こうした動きに対抗すべく、慶喜は朝廷に乗り込み、長年の懸念だった兵庫開港と長州藩処分を同時に勅許されたいと求めた。そして、五月二十三日午後八時から翌二十四日午後にかけての長い会議で、慶喜は国際的立場を説いて奮闘した末、兵庫開港の勅許を獲得する。

これは薩摩や長州の討幕派に、大きな衝撃を与えた。彼らは幕府がついに、朝廷を掌握したと見たのだ。そして武力討幕の現実化に、拍車がかかるのである。

■神戸の町づくり

神戸港の前身とされる大輪田の泊は奈良時代、行基が摂津・播磨に設けた五泊のひとつと伝えられる。



兵庫奉行となつた柴田剛中

眞偽はともかく、かなり古くから開かれた港であることは確かだ。福原に居住した平清盛は中国（宋）との貿易のため、大輪田の泊に経島（堤防）を築き、發展させた。この港は兵庫津と呼ばれるようになる。江戸時代になると兵庫津には北国の物資を土方へ運ぶ北前船が年に百数十隻も寄港し、国内貿易の拠点として繁栄する。安政五年の修好通商条約で、幕府が世界に向けて開くと歐米列強に約束したのは、この兵庫津だった。ところが西国街道の宿場でもある兵庫津には人家が密集しており、外国側も住民側も開港地とするのを望まなかつた。

そこで東隣の「神戸」と呼ばれる地域が開港地に選ばれる。ここは神戸村・二ツ茶屋

村・走水村で成る、寂しい田舎だった。兵庫開港は神戸開港となつたわけだが、これにつ

いては別段、異議をはさむ者もなかつた。

ともかく開港期限の慶應三年十二月七日まで、半年ほどの時間しか残されていない。急

ピッチで事業を進める幕府は、七月、外国人奉行と大坂町奉行を兼ねる柴田日向守剛中を

「兵庫奉行」として、兵庫に送り込んだ。兵庫

奉行は元治元年十月、外国の要求により幕府が設けた。これまで一人が就任したが、実質上の仕事をするのは柴田が初めてだつた。

四十歳の柴田は開国以来、江戸・神奈川間を往復して神奈川開港に尽力したり、外国人殺傷事件の処理に努めるなど、幕府外交の第一線で働いて来た能吏だ。

文久二年十一月、幕府の使節団に組頭として加わってイギリスに渡り、兵庫開港などを延期させる交渉も行っている。さらに慶応元年四月には、製鉄所・軍制を調査すべく、正使としてフランスやイギリスにも派遣された。ヨーロッパの近代都市を見、その文明を知っているか、神戸誕生の責任者としては、最もふざわしい人物と言えるだろう。ちなみに維新後は官に就かず、隠居して明治十年（一八七七）八月二十四日、他界している。

八月のおわり、柴田は地元の有力者に工事を請け負わせた。入札の結果、落札したのは神戸村の庄屋で、勝海舟などとも親父があつた生島四郎太夫である。

こうして西は鶴川、東は生田川、北は西国街道、南は海岸線までの約七・五万坪に外国人居留地が造成されゆく。ヨーロッパの最新都市計画になら、百十六に区画された居留地は、明治三十一年の条約改正まで日本人の主権が及ばぬ、外国人の自由に任せられた特殊な地域となる。

だが、さすがに開港までに、全ては完成されなかつた。当時まで設けられたのは、密貿易防止のための十四カ所の閑門（柵所）、東西の運上所（税関の前身）、倉庫三棟、船入場くらいだといふ。他に西国街



兵庫開港に尽力した將軍慶喜

慶喜は、これを許可した。二百八十余年余り続いた徳川政権は、ここで即消滅したと思われがちだが、それは違う。幕府と將軍の寿命は、もう少し続く。そして、そのことが神戸開港に深く関わる。

大政奉還を認めた朝廷では、諸大名を集めて会議を開き、今後のことを決めてゆくつもりだ。それまでには徳川氏が内政・外政ともに担当し、平常どおりの業務が続けられるのである。

大政奉還を行った慶喜は慶応三年十一月二十四日、征夷大將軍の職も返上したいと朝廷に願い出た。しかし朝廷はしばらく見合させてくれと、願いを却下している。

慶喜にとり大政奉還は、死中に活路を求める、捨て身技だった。薩長による武力討幕の氣運が高まる中、慶喜はいつん一大名になる。そして、新しく生まれる政権のトップに、合法的に座ろうとしていたと考えられる。だから、全國總石高の四分の一を占める広義な意味での幕府直轄の天領は、政権の基盤となるから手放していい。

一方、大政奉還を上表したのと同時に、薩摩・長州藩はひそかに「討幕の密勅」を手に

道付け替え工事（徳川道）の大半が出来ていた。

正式な開港まで、外国人の上陸は禁止されていた。しかし待ちきれず、こつそり陸に上がった者もいた。

「湊川のだたっ広い砂洲に驚いたが、すかり干あがつているから将来競馬場にでもすればいいだろう。神戸と大阪の間にある川は、どれもが地よりも相当高い堤防に守られている天井川で、湊川同様、川という感じはまったくしなかった。住民はとても友好的で不愉快な仕打ちをうけることもなかつた。サカヤキをそつてチヨンマゲをのせている日本人の風体は、日本では、あたりまえのことかもしれないが、今まで清国で見馴れていた弁髪よりも、もっと異様で野蛮な感じがする」（瑞博・小出史郎共訳『神戸外国人居留地』）

■慶喜の大仕事

將軍慶喜は苦難のすえ、兵庫（神戸）開港の勅許を獲得した。神戸にとつては「大恩人」のはずだが、そのような評価はあまり聞かない。その後、幕府を倒した新政権が掲げた、いわゆる薩長忠親が水元影響したせいもあるのだろう。

その慶喜が、「大政奉還」の上表文を朝廷に差し出したのが、慶応三年十月十四日のこと。朝廷は翌十五

入れていた。「賊臣慶喜」を討ち、「回天の傑勲」を行ふといった内容だ。ただしこれは正式な手続きを経ずに出された、いわば偽勅であつた。共同で偽勅を作成することで、討幕派内の結束を固める目的があつたと多えられる（井上勲「天政復古」）。

勅許が出て以来、幕府が準備を進めて来た神戸開港の期限は、十二月七日に迫っている。太陽暦にすると一八六八年一月一日だ。これは歐米列強と約束した開港期限だから、破るわけにはいかない。薩長としては、一刻も早く朝廷に会議を開かせ、大政奉還後の新政権を築きたい。そうすれば新政権の手で、神戸開港を行つたと歴史に刻める。くすくすしてては、神戸開港は幕府や慶喜の手柄になつてしまふのだ。

だが、結果から言えば、神戸開港までに会議は開かれず、新政権も誕生しなかつた。よつて開港記念式典は、幕府によって行なれた。式典の場所は外国人居留地脇に建てられた運上所のちの神戸税関である。神戸では初めての洋館で、窓にはガラスがはめられていたので、「ピロードの館」とも呼ばれていた。ここに兵庫奉行の柴田剛中をはじめ幕府関係者や、外国代表が列席。各國領事館にはそれぞれの国旗がひるがえり、海上に停泊する十八隻のイギリス・アメリカ軍艦からは、祝砲が放たれた。

この日、西の兵庫の町では天からおれが降り、人々が「ええじゃないか」と叫び、踊り狂っていた。祝賀ムードが高まつて、群衆の一部が連上所に踊り込んで来たという話も伝わる。同じ時、東の西宮に待機していた長州藩の軍勢は、京都を目指して進軍を開始していた。彼らの耳にも、開港の祝砲は届いたであろう。時代は、大きく転換しようとしていた。

一日後、会議も開かぬまま強引に「天政復古」の大号令が発せられ、幕府政権は完全に消滅する。そして、総裁・議定・参与の三職から成る新政権（維新仮政府）が誕生した。
ところが慶喜には、一切ボストンが与えられなかつた。それどころか新政権は、慶喜に辞官納地を迫る。あまりにも酷い仕打ちに対する幕府関係者の怒りは、やがて戊辰戦争へと發展してゆく。
このように神戸開港は、二百数十年にわたり日本を統治し続けた徳川幕府の、近代日本への置き土産となつた。それは最後の將軍慶喜の、最後の大仕事だつたわけである。

第三章 神戸事件

■事件勃発

「王政復古」により誕生した新政府は、親藩の摂津尼崎藩・淡平家、四万石を牽制するため、備前岡山藩に西宮警備を命じた。これを受けた岡山藩は、一千人の軍勢を送り出す。家老の日置^{ひき}帶刀率いる五百人から成る一隊は陸路をとり、明治元年（一八六八）一月十一日、大藏谷を発つて西国街道を東に進んだ。

正午ころ、行列は神戸村の三宮神社前にさしかかった。南側（現在の大丸あたり）は海岸まで、外国人居留地である。

その時事件は起きた。一人のフランス水兵（異説あり）が、左右から行列を横断しようとした。岡山藩はこれを無礼と受け取り、三班隊長の演善三郎正信が、槍で突いたのだ。さらに岡山藩は威嚇射撃を行つたので、外国兵は逃げ惑った。

これが開港から一ヶ月を経た神戸で起きた「神戸事件」の発端である。

日本人は外交下手だとよく言われる。確かに幕末のベリー来航以来、外国相手の交渉において、ある時

は相手を異常なまでに恐れて卑屈になり、またある時は居丈高になつて、失禮を繰り返した。

そして神戸で勃発した事件でも、動搖する新政府は外國側のペースに、まんまと巻き込まれてゆく。演出したのは、英國公使ハリー・パークスだ。パークスにしてみれば、新政府など赤ん坊に等しかつたであろう。

事件が起こるとパークスは、公使館警備のイギリス兵を練り出し、さらに合図を発してアメリカ・フランスの兵も軍艦から上陸させて、岡山藩の行列を襲わせた。しばらく双方撃ち合つたが、戦意に乏しい岡山藩は大砲や荷駄を棄棄して、布引から山手へ退却する。さらにはフランス・イギリス・アメリカの各軍隊は神戸村を占領し、港に停泊中の諸藩軍艦數隻を拿捕してしまう。当時の神戸は幕府瓦解直後で、兵庫奉行の柴田剛中も江戸に逃げ帰つて不在。無法地帯に等しかつたのだ。



神戸事件が起きた三宮神社前（神戸市中央区）

俊介登場

ここに救世主のことく登場するのが「伊藤俊介」だ。当時、名を俊輔から「俊介」と改めていた。さらにのち、俊介は「博文」とするのだが、これはかつて高杉晋作が「論語の『博く約するに文を以てす』」を引き、勧めたからだという。あるいは、号を俊輔と音があり通じる「春帆」にせよと勧めたのも、字を「子簡」にせよと決めたのも晋作だという（里村十介「藤公美談」）。

とろかく「伊藤俊介」の名は、誕生したばかりの新政府メンバーの中には見当たらない。自身「伏見鳥羽の戦争の時は、吾輩は国に居つた」（伊藤公全集・三）と述べている。下級武士であり、それほど名前が知られていたわけではないのだろう。だが俊介は、文久三年（一八六三）にイギリス・ロンドンに秘密留学するなど、等身大の外国人を知る数少ない日本人であった。

俊介は木戸孝允にあてた手紙の中で、「私儀は暫く兵庫へ参り滞泊つかまつり、その上にてあいなり候事なれば、米国あたりへ遠遊つかまつりたく、ひそかにあい望み候」（伊藤博文伝・上）と、今後の予定を知らせている。度はゆっくりと、海外に留学したかったようだ。そこで、アメリカ行きの便を探したため、一月十日、俊介は下関から兵庫に向かうイギリス船に乗り込んだ。

俊介が兵庫（神戸）に到着したのは、神戸事件が起きた翌日の一月十一日である。ところが、神戸は外国人に占領されており、とてもアメリカに行けるような状況ではない。このタイミングが、俊介の運命

を大きく転換させたといえる。

見かねた俊介は、ともかく旧知のバーチスを訪ねた。この時点でなお、日本側は誰もバーチスと接触していない。それを考へると、外国相手でも物怖じしない、俊介の機敏な行動は評価出来る。

だがバーチスは、憤慨するばかりだ。

「今まで長州は開国論であつて誠の朋友だと思つておつた。備前なども長州の方に傾いてゐるというふうを思つてゐたが、今度の始末については日本人挙げてことごとく攘夷論であるものと認めなければならぬ」（伊藤公全集・三）

こんな調子で、俊介の話に耳を傾けようとしない。俊介はその真意を知っていた。バーチスは事件を契機に、今後新政府が力強く対して頭が上がりぬような力関係を築いておきたいのだ。

「よろしい、私が三日のうちに始末をつける」（伊藤公全集・三）

と言いつった俊介は、大阪に赴き、新政府の要人となつてゐた藤田象六郎や五代才助らに「すぐに新政府を宣言しなければならぬ」と説く。幕府を倒して誕生した新政府は、この時点ではまだ外國側に何の挨拶も行つていなかつた。「攘夷」を掲げ、「開国」した幕府を非難して來た薩摩や長州が、政権を奪つた途端、「開国」を唱えたら、信望を失うとの危惧があつたのだろう。だがこうした非礼は、バーチスに日本を攻撃の口実を与へかねない。

俊介の意見は採用され、外國事務取調掛の東久世通義が勅使となつて神戸に赴く。そして十五日、運上

所にフランス・イギリス・イタリア・アメリカ・ドイツ・オランダ公使を集め、「王政復古」が宣言された。やがて新政府の誕生は、各國公使により本国に報告されてゆく。後介は「これで初めて外国人が新政府を認めた」(伊藤公金集・三二)と述べている。

こうして外國側も、新政府を日本代表と公認せざるをえなくなり、その上で、神戸事件解決のための交渉が始まった。等身太の外國を知る後介が周旋しなければ、問題はさらに深刻化していたかも知れない。

■新政府に出仕

「神戸事件」は、新政府が直面した初めての外交折衝だった。日本は「王政復古」により、「將軍」から「天皇」に政権が移ったと各國公使に認めさせ、筋道を立てた上で交渉を始めたのは賢明だった。新政府には後介が必要になつた。一十八歳の後介は、これを機に外國事務掛に登用された。その辞令は次のとおりだ(伊藤博文伝・一)。

「外國事務掛仰せ付けられ候事」

一月十六日、外國公使が示した条件は、厳しいものだった。特に「岡山藩側の」発砲する様下知致せし士官は死罪」の一条は、波紋を呼ぶ。なぜなら神戸事件では、岡山藩・外國側ともに、誰ひとり死んで

いないからだ。しかも、全面的に岡山藩側に非があるのか否かも、十分には審議されてはいなかつた。

ところが新政府は、この条件を承諾してしまう。そうすることで、英國公使バークスらの怒りを鎮め、穩便に解決しようと必死になつたのだ。ちなみに岡山藩が衝突したのは、フランス兵である。にもかかわらず、以後の日本の歴史には、イギリス兵として記録される場合が多い。そつした勘違いが生まれるほど、バークスの過激で強引な態度に、新政府は恐怖を感じていたようだ。

二月一日、新政府は岡山藩側に、責任者を差出し、兵庫まで送るよう命じた。こうして滝善三郎正信という「人柱」が立たれ、朝議のすゝ切腹が決まる。

滝善三郎は、岡山藩主池田家の直接の家臣ではない。岡山藩家老の日置家に仕える、陪臣である。幼くして萩野流忍術家の父を失つたが、小野派一刀流の剣術や槍術も修めた。十七歳からは日置刀の側近を務めていた、三十二歳の逸材である。

俊介と外國事務掛の五代才助は滝の助命を外國側に願い出たが、無理だった。バークスには「日本天皇が刑罰を命ぜられたる場合には外國公使より嘆を容れるべき理由なきにありすや」との理屈で、ていよく逃げられている。実はバークスは、最後には減刑を主張したのだが、フランス公使ロッシュが強行したのだという。

こうして滝の切腹は二月九日午後十一時三十分に、兵庫の水福寺で行われると決まつた。



滝善三郎の切腹

けられ、日本は危機を脱したのだった。

■信義と公法と

滝善三郎は切腹させた「神戸事件」における新政府の処置が、國辱外交などの非難は当時からあった。さらに、月十五日には、泉州堺を警護中の土佐藩兵がフランス兵と衝突して死傷者が出て、またもや新政府は危地に立つ。

そんな中で書かれた、三月二十八日の井上馨書簡（伊藤博文閑係大書）、「昭和四十八年」は印象的だ。当時、井上は長崎で新政府の徵士參議・外國事務局判事として、キリシタン問題に取り組んでいた。井上の手紙は二通あり、一つは後介、いま一つは木戸孝允にあてられている。その中で井上は神戸や堺の事件につき、新政府の態度を激しく非難する。

井上は、幕府が滅んだのは外国に接する時、恐怖が先に立ち、外交を誤ったためと分析。そして新政府もまた、同じ過ちを繰り返さうとしていることを指摘する。

どんな国が相手でも「信義」と「公法」で外交を行えと、訴える。そしてもし、それが通用しなければ、戦いのすえに国が滅んでも構わないではないかもという。

いまでも日本の外交は、相手国に対し強く出れば、威嚇を示したなどと国民の喝采を浴びる。あるいは

前日、滝は妻と二人の子供の無事を祈り、遺書をしたためた。四歳の息子には、「忠孝道あい守り、御奉公第一に候」、一歳の娘には、「女子は女子道、親へ孝行致すべく候」と伝えた。さらに妻や母、姉にも歌を残している。

当日、滝は寺の奥の間で、衣服を白無垢に改め、麻の上下に威儀を正したまま、時が来るのを待った。この間、

詠曲をうたったという話も伝わる。

そして多くの日本・外國検証人が見守る中、滝は本堂仏壇前に設けられた席で、切腹して果てた。実は外国人たちも見るため、腹を切る真似をさせ、後ろから首を落とすというやり方に決まりかけていた。

しかし反対したのが、岡山藩の見届役だった。武士の本懐を遠げるため、正式の切腹を行つて欲しいと訴えたのだ。

こうして壮絶な「ハラキリ」を、外国人たちは初めて目の当たりにする。そして滝の犠牲により外圧は緩む付

恫喝したり、相手を驚かしたり、のらりくらりと煙に巻いたりという外交が、昔から英雄譚として伝えられたりもする。

だが、そうした小手先の外交ではなく、「信義」と「公私」であると言いついた井上の決意は、国際社会に乗り出した新時代にふさわしい。

先述のとおり井上は、俊介らと共に長州藩の秘密留学生としてイギリスに渡っていた。「等身大」の外国人に接したからこそ、こうした感覚が身についたのだろう。卑屈にも居丈高にもならず、あくまで同じ

人間として接する外交である。



明治元年当時の伊藤博文秘録
（右）伊藤博文の後介
（左）大久保利通

神戸事件の处置は、当時の日本にとっては精一杯だった感もあるが、井上の言のよう

に貴重な外父の教訓や反省点を、後世に残

したものと確かだ。

滝善二郎が切腹したのは、現在の神戸市中央区南仲町にあった永福寺だ。境内には

昭和八年（一九三三）有志により滝の慰靈碑が建立された。同寺が戦災で焼失後、碑

は「兵庫大仏」で知られる能福寺（神戸市

兵庫区北淡瀬川町）に移され、現存する。

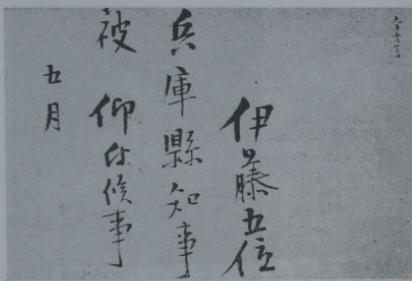
昭和十三年（一九三八）、神戸市の潤正信彌影会が出版した岡久潤城「明治維新 神戸事件」は、貴重な文献だ。現在では収集困難と思われる史料や談話が、多く集められている。

この中で、滝の人柄を伝える逸話が紹介されている。子供のころから納得しなければ、容易に動かなかつたというのだ。「理否曲直明らかななりれば、容易に人に屈ざるの風貌」とある。

もう少し前に事件が起っていたなら、滝は無法の外國兵を追い払った「攘夷志士」として、絶賛されただはずだ。ところが攘夷を旗印にして幕府を非難し、打倒した長州・薩摩藩は、権力を握るやあつさりと攘夷を捨て、開国に転じていた。

不幸にも滝は、それを知らなかつた。腹直前、自分は「遼國の者」だから、朝廷が外国人を丁重に扱う方針に変わっていたとは知らなかつたと、語り残している。大人しく切腹の座に就いた滝は、王政復古により変わった公法により、自分は切腹させられるのだとも語っている。そのように自分に言い聞かせ、納得させよとしている心情がうかがえる。

滝は価値観が急変した、過渡期の犠牲者だったのである。



初代兵庫県知事の許令書 (伊藤博文伝・上)

■最初の事件

最初の兵庫県庁は開港場地から遠く、不便であった。そ

そして「初代知事」に抜擢されたのは、二十八歳の俊介だった。国際貿易港神戸を擁する兵庫県のトップは、外国人との交渉が出来ねば勤まらないからだ。同月六日に俊介は、従五位に叙せられていた。それを知った父には、萩で息子の出世を喜ぶ祝宴を開いたという（末松謙澄『孝子伊藤公』）。

最初の兵庫県庁は、現在の神戸市兵庫区切戸町にあった。中央卸売市場近くのプロムナードに「兵庫城跡、最初の兵庫県庁の地」の石碑がある。戦国の昔、ここに池田氏が城を築いた。明治維新のさい兵庫鎮台となり、さらに兵庫裁判所と改められ、兵庫県庁となる。当時県庁

第四章 初代兵庫県知事

■兵庫県誕生

周知のとおりこの後、伊藤俊介こと博文は政治家として榮達を遂げた。それは本人の力量や努力もさることながら強運の持ち主だったことも大きく作用している。

当初、新政府からお呼びもからなかつた俊介がアメリカ留学を決意し、神戸に降り立つたのが、後から考えると運命の別れ道だったと言えよう。「神戸事件」解決のために自覺正しい働きを見せた俊介を、神戸の人々は放そくしなかつたのだ。アメリカ留学は自然、中止となる。一月十五日には俊介は、参与という新政府の大官に就任していた。總裁、議定ともに三職と称される參与はそれぞれの行政部門を担当し、その実権を握つた。俊介は外交関係で、同僚に井上馨や、薩摩の寺島則などがいた。

それから間もなく、神戸は大阪府の管轄からはずされ、あらたに兵庫県が誕生した。明治元年（一八六八年）五月二十三日のことだ。もつともこの時の兵庫県は天領部分、現在の神戸、阪神間と播磨の一部に過ぎない。



兵庫県知事時代の伊藤俊介
〔伊藤博文伝・上〕

だ。こうして談判を重ねた結果、明治二年三月、アメリカ公使は男の本国送還を決めた。だが、外國官に報告があった。月、アメリカ公使は男の本国送還を断じ、禁獄一年に処す。その上、男の本国送還を決めたようやく事件は落着した。日本側が求めたより、男の罪がかなり軽いのは、領事裁判権を認めた、幕末に締結された条約のせい。

青木が、息を引き取つてしまつ。

これは開港以来、外国人が日本人を殺害した初めてのケースになつた。

俊介としてはアメリカに悔られ、悪い前例を作るわけにはいかぬから、ますます奮起した。まず、政府に「今回の大事件、かつ、政府の威儀が立つか、立たぬかに關係します」と、男の死刑をアメリカに求めるよう手紙で訴えた。さらに参考人の始末書や医師の診断書などを添え、アメリカ領事に事件を知らせ、抗議した。

ここで俊介は新しい県庁舎を、広義寺山（大倉山）の麓（現在の神戸市中央区福通）に建てるに決定。明治元年六月二十五回に起工式を挙行した。

ところが、九月三日午後三時ごろ、建設中の県庁で事件が起つた。外国人の男がひとり、酔醉したまま飛び込んで来たのだ。男は普請掛の役人に絡んだり、職人の作業を妨害したりする。ちょうど建築現場を視察中だった俊介は、男に子細を尋ねようとするが、酔つていて要領を得ない。それどころか男は、鼻歌など唄いながら、なおも作業の邪魔をしようとする。そこで俊介は、男が持っていた棒を取り上げた。すると憤慨した男は小刀を取り出し、俊介に襲いかかる。俊介は男を捕らえ、アメリカ領事館に引き渡して、処分を求める。男はアメリカ商船ギング・ヒリップ号の水夫バール・マスコだった。

さらに調べるうち、男の余罪が判明する。この日、男は福原（現在の神戸市兵庫区）の遊女屋あたりで酒を飲み、暴れていた。新政府に召され、神戸警護を担当していた篠島藩士青木孟は、これを止めようとする。ところが男は青木の背中を小刀で突き刺し、逃走。建設中の県庁舎に飛び込んだのだつた。

俊介は政府の外國官に、男を厳しく処罰した上、アメリカに洋銀五百元の罰金を要求するのが至当ではないかと具申する。さらに政府やアメリカを相手に交渉を続けるが、二十八日になつて重傷を負つていた

ちなみに県庁舎は事件の最中に完成し、九月十八日には開庁式が行われた。ただし細部まで完成するのは十一月のことだ。約一万八千平方メートル、立て面積は約一千六百五十万平方メートル、骨の間は四百八十疊。明治六年五月、県庁が現在地（神戸市中央区下山手通）に移転するまで使われ、その後は裁判所となり現在に至る。

選話あれこれ

兵庫県知事に就任したばかりのころ、俊介は和服で、頭に髪を結い、腰に刀を差していた。やがて散髪して四分六に分け、チョウネクタイに洋服を着込んだ。このため市民からは、「坊主奉行」とあだ名されたという（岡久潤城「神戸物語」）。

俊介が住んでいたのは、現在の神戸市中央区北長狭通六丁目、高速花園駅のすぐ北側だ。この地にあった橋本藤左衛門別荘の「橋本花壇」（吟松亭）が、知事である俊介の住居だった。

ここで俊介は、故郷長州から呼び寄せた妻梅子、長女貞子とともに風流な生活を送った。そして馬に跨がり、県庁（現在の神戸地方裁判所の地）に出勤した。

当時の俊介の月給は五百円。これは現代の数千万円もの価値があるとされる。俊介は萩に住む両親に、

数回にわたり仕送りをした。そのさいの添え状には、

「私儀は衣食の不足もこれ無く、君恩身に余り、何卒万分の一も報い奉りたく」

などとある（孝子伊藤六二）。

明治元年八月には、女の子が誕生した。俊介は氏神が生田神社（現在の神戸市中央区）なので、男なら生田丸、女なら生子と名付けよう、決めていた。成長した生子は、末松謙海（文学博士、文部大臣、子爵）の妻となる。

俊介が最も崇拝していた歴史上の人物は、後醍醐天皇に忠節を尽くした楠木正成（楠公）だった。神戸・漆川には建武三年（一三三六）五月十五日、この地で足利軍との戦いに敗れ、自決した正成の墓があつた。元禄五年（一六九二）、水戸藩主徳川光圀が碑銘「嗚呼忠臣楠子之墓」を書き、建立した有名な墓碑である。ここに神社を建てる計画が、幕末のころから何度も起つては立ち消えていた。

明治元年四月一日、俊介らの神社建立請願を明治新政府は許可し、一千両を下賜した。しかし戊辰戦争などの混戦で再び立ち消え、完成したのは明治五年五月のことである。漆川神社の名が決まり、別格官幣社に列せられた。現在、俊介こと博文が明治九年九月に正成墓前に寄進した石灯籠一对が残る。そこには

「太歲少輔從五位兼民部少輔 越智宿林博文」と銘記されている。

当時、俊介が交遊した一人に実業家の藤田泰蔵がいた。屋号は長崎屋。もと長崎の武雄商人で、その前はイギリス人ラウダーの従僕だった。元治元年（一八六四）八月、四ヵ国連合艦隊に便乗、下関砲撃を視察したい、俊介と知り合った。のち新天地神戸に移り住み、俊介との関係もあり巨利を得たのである。

(神戸新聞社編「故郷燃える・幕末編」)

ある時、俊介は藤田に一振りの短刀を譲つた。それは吉田松陰が、アメリカ密航を企んださい、所持していたと伝えられる刀だ。

以来、藤田家ではこの刀を家宝として大切に伝えたが、昭和四年（一九二九）、カナダ国バンクーバーに住むライフ・アウター・ブリッジに贈られた。それが昭和六十三年、カナダ人から松陰生誕地の萩市に贈られたといつて後日談がある。（松陰遺墨展示

館のキャプションより）。



橋本花壇で撮られた俊介(左)と中島・サトウ
(続伊藤博文秘録)

知事時代、俊介が仲間とともに橋本花壇で撮影した写真が残る。大きな石灯籠を背に、中央に座るのは兵庫県判事の中島作太郎（信行、土佐出身）、その右がイギリスの外交官アーネスト・サトウ、左に腰を出して立つのが俊介である。鋭い眼光の俊介は、青年知事の朝氣を感じさせる。しかし、部下の中島の方が知事俊介よりも立派に見えるのが、なんともおかしい。

兵庫県政資料館（神戸市中央区下山手通四丁目）では、この写真を大きなパネルにして、展示室の最初のコーナーに掲げている。兵庫県政史の中で、俊介がどのような位置を占めているかを、如実に知ることが出来る。

■兵庫論のこと

俊介は明治二年四月十日、兵庫県知事を免ぜられた。そのまま京都の新政府に提出した意見書だ。それは姫路藩主酒井忠邦が、朝廷に対する版籍奉還を願い出したことに刺激され、書かれたものである。

天皇を頂点とする統一国家建設を考える俊介は、全国の大名が政治や軍事の権限を、天皇に奉還せよと説く。さもなくば「百年の後、我皇國（日本）の威武を海外に輝すこと難し」とまで言う。これを受けた政府首脳の木戸孝允や大久保利通は、まず、維新の「勝者」である薩摩・長州・土佐・肥前・四箇藩に率先して版籍奉還を願い出させ、続いて全国の藩もこれに倣わせようと考えた。勢いづいた俊介は、翌年一月、今後の日本の姿を六カ条に分けて記した「国是綱目」を建白する。これは、皇統を維持し、版籍奉還を行つて郡県制をとり、外国と交流し、教育を普及させるなどと説く、近代國家の青写真だった。

ところが俊介の進歩的な考え方は「兵庫論」と呼ばれ、特に保守勢力から激しい反発を受ける。故郷長州で暮らす、俊介の説を理解しない者が多かった。

「これがあく誤解を受ける原因になつて、我が藩でも、吾輩をエライ不忠者にして、國を滅ぼさせるやうな議論をする者を朝廷に出して置く訳にゆかんと云ふ国論になつた」

と、後年、俊介は回顧している。スピード出世した俊介に対する妬みもあったのだろう。長州の御堀耕助などは京都に乗り込んで来て、政府高官となっている木戸孝允や佐沢貞臣に抗議し、俊介の足を引ついた。

ある時俊介は、政府の議定官倉見視から呼び出され、「しばらく隠れて時機を待て」と忠告される。実は岩倉も幕末のころ、その考えが理解されず、奸物と呼ばれて生命の危機にさらされたことがあつたのだ。

こうして俊介は、物議を避けるため議論を慎むこととなつた。

だが、俊介が持った種は芽を出す。明治二年一月二十三日、薩摩・長州・土佐・肥前の四藩主が版籍奉還を建白し、これに大部分の藩が続くこととなつたのだ。

知事を罷免された二日後の四月十二日、俊介は「要港の儀につき」、兵庫県判事となつて、一代目知事の久我難磨を補佐せよと命じられる。あからさまな降格人事だ。

だが、すでに東京に移っていた中央政府は、俊介を呼び寄せる。俊介は二十九日、海路、東京に向かつた。そして大蔵少輔と民部少輔を兼ねることになる。血氣盛んなバイオニア精神ゆえ、わずか一年足らずの任期で終わつた、初代兵庫県知事であった。

*本書の一節は「神戸新聞・夕刊」連載の一報大郎（ひょうだいろう）をベースにしています。同連載は平成二十年七月、神戸新聞出版センターから單行本として出版されたので、併せてお読み頂ければ幸いです。

萩を知ろう！萩を楽しもう！萩を伝えよう！

■シリーズ「萩ものがたり」既刊タイトル

タイトル	著者名	定価
①萩の椿	吉松茂	600円
②高杉晋作100回	一坂太郎	500円
③萩開府—毛利輝う	北村知紀	600円
④萩まちじゅう博物	西山徳明	600円
⑤松陰先生のこと	萩市立明倫小学校(監修)	500円
⑥密航留学生「長井」	宮地ゆう	600円
⑦萩と日露戦争	一坂太郎	500円
⑧萩の巨樹・古木	草野隆司	600円
⑨吉田松陰と現代	加藤周一	600円
⑩萩沖の魚たち(著)	中澤さかな／堀成夫	600円
⑪萩の史跡	一坂太郎	500円
⑫山田顕義—治法園	秋山香乃	600円
特別編 ますらをか	一坂太郎	1300円
⑬川柳中興の祖一	大庭政雄(監修)	600円
⑭高島北海 HOKKAIGI 萩とナンシー	高樹のぶ子	600円
⑮桂小五郎	一坂太郎	500円
⑯萩沖の魚たち(秋・冬編)	中澤さかな／堀成夫	600円
⑰若狭の伊藤博文	一坂太郎	500円
⑱宮本常一が見た萩	中澤さかな	600円

販売所／萩博物館、萩市観光協会、明屋書店、道の駅・市内のホテル旅館、萩市役所受付など
※郵送での購入は、萩ものがたり事務局まで電話・FAX・Eメールでお申込みください。

萩ものがたりは、定期購読ができます。

年会費2,000円にて、年間4タイトル(4・10月発行)を定期配本。

* 定価割引の特典があり、確実にお手元に、送料は無料！

お申し込み方法 ハガキ・FAXでの申込み 住所、氏名、電話番号をご記入ください。
電話・インターネットでの申込みもお受けします。

会費のお支払い方法 申込みと一緒に郵便振替用紙をお届けします。

銀行からの口座引き落しもできます。



有記責任
中間法

〒758-8555 山口県萩市大字江向510番地

TEL 0838-25-3233 FAX 0838-26-5458

<http://www.city.hagi.yamaguchi.jp/portal/book/booklet.html>

E-mail story@city.hagi.yamaguchi.jp

落丁本・乱丁本は発行所宛にお送り下さい。送料発行所負担にてお取り替えいたします。

刊行のことば

山口県萩市は、本州西端に位置し日本海に面します。江戸時代は毛利三十六万石の城下町として栄えました。幕末には吉田松陰をはじめ多くの逸材を輩出した明治維新船頭の地として知られています。

このようにから全國に例を見ない近世の都市遺産、明治維新関係史跡や史料、近代日本の礎を築いた多くの人物に加え、北長門海岸国定公園の自然美など、宝物ともいいうべき資源に恵まれています。

しかしながら、明治維新は風化しつつあると言われるよう、かつては萩に伝承されたきた物語などが消えつあります。

毛利輝元が安芸の国(広島県西部)から萩の地に移封され、開府してから、平成十六年(2004年)は四百年の節目となります。

そこでこれを機に、萩に残るのみのある歴史文化・人物、豊かな自然、多彩な行事や風物、民間伝承、伝統産業など、後世に語り継ぐべき萩のすべてをブックレット・シリーズ「萩ものがたり」として定期的に刊行し、後世に伝承することも、全国に向け発信することとしました。

読者の皆様が、この小冊子を活用され、萩の素晴らしさを楽しみ、理解する一助となるよう頑つてやみません。

《著者紹介》



一坂 太郎 昭和四十一年兵庫県生まれ。大正大学文学部史学科卒業。東洋文庫記念文学研究員を務めるが同館閉館により退職。現在、萩市立博物館委嘱員。防府天満宮歴史館顧問。福祉文化大学教授を務める。最近の著書に「東海道新幹線歴史散歩」(幕末版)、「東京篇」(京都奇兵隊)、以上、中公新書、「松陰と晉作の書」(ベスト新書)、「高杉晋作」、「文泰春新書」、「幕末英傑たちのビート」、「朝日新聞」などがある。

定価 500円（本体476円+消費税24円）

初代内閣総理大臣を務め、明治を代表する政治家として知られる伊藤博文。そのスタート地点は開港間もない神戸の地だった。運と才能に恵まれ、時代の寵兒となつた热血漢の若き日々を描く。

平成二十二年（二〇〇九）は、伊藤博文没後百年に当たる。



秋市立秋図書館

秋
ものかたり

若き日の伊藤博文

2008年4月1日 第1刷発行

著者 一坂太郎

発行者 野村潤兒

発行所 有限責任中澤法人 斎ものがたり

印 刷 有限公司マツヤマ印刷



110955663